

2016. 5. 26 (木)

私の留学経験

貴戸理恵

学生時代の留学

今日は「世界に出会う」ということについて、私自身の留学の体験からお話させていただきます。

私は2014年4月から2016年3月まで、オーストラリアの南部のアデレードという町に留学していました。

それまでの留学経験は、中学のときに1ヶ月ブリスベンに、大学で1ヶ月カリフォルニアに行っていただけです。引率の先生と一緒に渡航し、ホームステイや学生寮に短期間いました。アメリカ人や台湾人の友人ができたり、レスピアン先生のクィアスタディーズを学んだり、いろんなプログラムに参加したり、充実した貴重な時間をすごしました。

大人になってからの留学

けれども、今回の留学はこれまでとはまったく違うものでした。まず、期間が長く、家族、特に4歳と1歳の子どもがいたので「生活」がありました。住まいを手配して、保育園や幼稚園の情報を集めて、電気やガスを引いて・・・慣れない英語でそれらをやるのはとても大変でした。またオーストラリア

は日本からみると良くも悪くものん気な雰囲気、主張しないとすべて業者のいいようにされてしまいますから、「この日のこの時間しかないからここで配達をお願い」といちいち言わなければならない。遠慮したり空気を讀んだりしていたら、後回しにされて家族の暮らしが成り立ちませんから、かなり図々しくなりました。あと、ママ友を作らないと情報がなくてこないのは日本と同じなので、ご近所づきあいをしたり、日本人家族のコミュニティと交流したりしていました。

もうひとつは、大学院の博士課程に正規入学したということです。今までさぼっていたツケが回ってきて、奨学金をいただけるレベルの英語力、というかTOEFLのスコアを取るのがとても大変でした。今、TOEFLはibtになっていて、ライティングやスピーキングがあります。正攻法では間に合わないので、受験テクニックみたいなものを駆使してやっと何とかしたのが、出発前の2月とギリギリでした。合格点がPCで表示されたときは思わず画面を拝んでしまいました。

大学が始まると、あとはひたすら英語でのプレゼンテーションや論文執筆の成果を求められる世界になります。周りみんな、大学院の博士課程の学生。私はすでに大学の教員ですから、みんなよりは研究歴があります。

研究の手続きや論文の書き方は分かっている。でも、英語はできなくて、常に英語を見てくれるエディターを二人つけていました。一人は英語を直す人、もう一人はアカデミックイングリッシュにする人です。

言葉の不自由は、本当にしみじみと感じられました。特に、研究者の世界は「書かれたもの」がその人の顔のようなものです。そして、「書く」ということは、一定の広がりを持つ読者に向けて、普遍性を持つ情報を発信するということです。これは難しい。ネイティブだってそうですよね。みなさんも、日本語ネイティブなら、聞いてしゃべることは完璧で、読むにも難解な学術書を除いて不自由はないでしょうが、「読まれるに値する文章を書く」のは一番難しいですね。論文には一定の形式があって、私はその形式には慣れていましたからその点は良かったんですが、それでも、日本語なら10分でかける文章を書くために2時間を費やすという状態です。で、「ネイティブであれば」と歯噛みしない日はなかったです。

なぜ私は英語で書くのか

苦しかったですね。一生懸命つむぎだした私の言葉が、エディターにいじられて原型をとどめていないこと。指導教授を入れて3人の人に見てもらわなきゃならないから、締め切りをいつも早めに設定しなければならぬ時間的なハンディキャップ。英語を整えるために支払う膨大な金銭コスト。それだけ掛けても、最終的にできあがるもののクオリティは、明らかに日本語で書いたほうが高いことを、自分で分かっていること。

こんな思いまでして、なぜ私は英語で書く

のだろう？本気で考えました。何のためにやっているのかわからないと、踏ん張れないと思ったんです。回りの人に聞いてみました。私の周りにいたのは、ほとんどが中国からの留学生です。彼らは、英語圏で博士号を取って本国に帰って就職する、そのために必要だから英語で書くという。それは明確で分かりやすいモチベーションです。けれども、私にはそれはありませんでした。関西学院大学の教員としてよく言えば恵まれた、悪く言うと甘えた立場で来ていますから、「このキャリアで食べるため」というのは理由にならないんです。

日本で尊敬していた先生たちの意見を聞いたり、調べたりしてみました。そうすると、「効率が悪いから英語では書かない。日本語で本当に意味あることを書けば、そのうち誰かが英語に翻訳してくれる」とおっしゃる。これもあかん、と思った。そんなに立派な研究者では私はないから、いくら待っても誰も英語に翻訳なんかしてくれない。

結局私が考えたのは、「自分の研究成果を、日本語を解さない・英語を解する読者に伝えるため」というものでした。平凡に見えるかもしれませんが、これが私の答えでした。これまで私は、「自分が調べたり考えたりしたことや、調査に協力してくれた現場の人の言葉を正確に伝える」ことを研究の目的にしてきました。そのうえで、「分かる人が分かってくればいい」というようなスタンスがどこかにありました。そんなふうに「自分が見たものを正確に伝える」のであれば、日本語で書いたほうが圧倒的にローコスト・ハイクオリティのものが仕上がります。でも、そうではなくて、「英語話者に分かるように伝える」ことが第一義的な目的なのだ、という理

由を付けたわけですね。だから英語で書く、ものすごくコストがかかっても、クオリティに差がついても、英語話者に伝えることが目的なら、それをやるしかないんです。それを意識することで、苦勞の多さに自分で納得できるようにになりました。あとは、「伝えたい」と切望できるだけの結果を生み出せるか、というところに掛かっているわけです。

瞬発力と長期留学という選択肢

皆さんのなかにも、留学を考えている方がおられると思います。私から申し上げたいことは、二つです。一つは、留学をすると決めるときは、合理的な理由よりも瞬発的なエネルギーだと思っています。何が待っているか分からないけど、やりたい、突っ込んでみたい、というものです。もしそういう気持ちを持っていたら、それを大切にしてください。ただ、留学は楽しいことばかりではなく、絶対に苦しいことが起こります。友達が

できなくて孤独だとか、授業に付いていけないとか、ルームメイトとの文化摩擦とか。そのときに、苦しいことから目を背けるのではなく、その苦しさをあがなえるような留学の理由を見出して、立ち向かっていくことが重要だと思います。

もうひとつは、短期ではなく長期で、学位を取るつもりで留学をするというオプションの検討をお勧めしたいです。お金が掛かる！と思うかもしれませんが、留学生でもTOEFLのスコアが高く大学や高校の成績がよくていい推薦状を書いてもらえれば、学費の高い欧米の大学でも、学費や生活費が支給される奨学金が取れる可能性があります。就活に間に合わなくなる、という人もいます。でも、就活のために人生の選択肢を狭めても、リスクはゼロにはできません。先行きの見通しが悪くなっているこの時代。ぜひ、皆さんも思い切って世界と出会ってほしいと思います。

(社会学部准教授)